



同時発売の四名講談



塚原ト伝

劍豪塚原ト伝の波瀾万丈の剣修行、痛快とも、豪快とも、飛び切り面白い物語。



大岡政談

人情の機微をとらえ、頓智と機智と叡智で裁いた、名裁判中の二大政談と短篇。



清水次郎長

大政、小政、石松等の乾児と共に波瀾を極めた男一匹清水次郎長の任侠一代記。



水戸黄門

善をたゞえ、悪をこらしめ、滑稽、諧謔、洒脱を極める、覆面の水戸黄門漫遊記。

講談全集 寛永三馬術 奥付

昭和二十九年六月十日印刷
昭和二十九年六月十五日発行

編著者

大日本雄弁会講談社

印刷所

大日本印刷株式会社

発行所

東京都文京区音羽町三ノ一九
株式会社 大日本雄弁会講談社

振替口座 電話 代表 三三〇一
東京三九三〇 大塚 (94) 三三二一

定価 一五〇円

PRINTED IN JAPAN



目次

將軍家馬術をためす	（七）
自慢 じまん の馬術者スツテンドウ	（一二）
アイヤ暫 しば らくと現われたは	（一九）
乗りも乗つたり馬術のほまれ	（二五）
重役どもは盲目 めくら かッ	（三二）
螢侍 はたるさむらい とは貴様のこと	（三六）
快仲間 かいちゆうけん その名は度々平	（四二）
口も八丁手も八丁	（五〇）
沢庵 たくあん の大手搦手 からめて ぜめ	（五七）
先んずれば人を制す	（六四）
平九郎生駒 いこま 家を浪人	（七〇）
万事は度々平の胸に	（七五）

見るは法楽 ほうらく 、見られるは因果 いんが	(七八)
旦那 だんな ッ、馬 うま の尻 しつ がつかえます	(八六)
時節待 ときせうまち つ間の既仲間 うまや	(九二)
大飯食 おほいしくら いの仲間和田平	(九六)
將軍家 しやうぐん へ喧嘩腰 けんかこし	(一〇二)
馬 うま の耳 みみ にお説教 せつきやう	(一〇七)
指南番 しなんばん ならぬ葱南蛮 ねぎなんばん	(一一一)
騒 さわ ぎを外 よそ に大軒 おほいしき	(一一八)
度々 かんば 平悍馬 へいぱん を取りおさえる	(一二一)
霞隠 しずみかく れ玉隠れの秘術	(一二六)
千石 せんごく が一粒かけてもお断り ことわ	(一三〇)
若殿花嫁 わかしほ を見て気絶	(一三五)
酒 さけ のいわせる愚口雜言 あほうざうごん	(一三八)
知るや知らずや勇士 ゆうし の心中	(一四五)
・ヤ、ッ武士 ぶし の面体 めんたい を傷つけたかッ	(一五一)

取れば憂し取らねば物の数ならず	(一五七)
かゝあ天下に空ッ風	(一六二)
郷に入つては郷に従え	(一七一)
口ほどもねえ駄さんびん	(一七六)
褒美の証し、家宝の印籠	(一八二)
町奉行びっくり仰天	(一八六)
むじつの罪に召捕られる	(一九一)
小の虫を殺して大の虫を助ける	(一九八)
母の一念、駈込み訴訟	(二〇二)
由緒を語る系図の一卷	(二〇六)
賄賂などとは真ッ平	(二一二)
仲間から一足とびに八百石	(二一五)
立札をたてて接待酒	(二一九)
七人連名の果し状	(二二四)
母上、何ゆえの御自害ぞ	(二三〇)

一騎討 きうち に助太刀は無用		(二三八)
日本一の名人あらそい		(二四八)
三人義兄弟の誓 ちか い		(二五二)
涙 なみだ を誘 さそ う師弟の情		(二六〇)
闇討 くみうち とは卑怯 ひきょう 千万		(二六六)
寸善尺魔 すんぜんしやくま は世のならい		(二七二)
盃 さき に散るさくら花		(二七五)
血相 いざなり かえる壁 かき 乞食		(二八一)
市兵衛悲愴 ひそう の最期		(二八四)
短編 肉付きの面		(二八九)

口 絵 米 内 穂 豊
さし 絵 小 山 栄 達

將軍家馬術をためす

慶長、元和兩度の合戦によつて世は徳川のものとなり、槍はなげいに弓は袋という、泰平の御代とはなりましたが、武芸武術はいよくさかん、取りわけ三代將軍家光公は、殊のほかこの道に御執心でございます。

従いましてこの時代には、劍術では柳生宗矩、宮本武蔵、槍術では高田又兵衛、笹野権三郎、柔術では関口弥太郎、渋川伴五郎などという、幾多の名人上手が輩出したしましたが、馬術におきましても、曲垣平九郎、向井藏人、筑紫市兵衛という三人の名人が現われ、寛永の三馬術とたゞえられました。

中でも曲垣平九郎、愛宕山の石段、百三十余

段を乗りあげ乗りおろして、將軍家の御感にかなひ、家光公から日本一とお褒めのお言葉を賜りました。

さて、時は寛永十一年正月の二十八日、この日は二代將軍秀忠公の御命日とて、時の將軍家光公は、亡き父君の菩提をとむらいますため、芝三縁山増上寺へ御参拜、おごそかな法要をいとなまれました。

とゞこおりなく御法要も相すみ、往きはお駕籠でございましたが、お帰りには特に馬をひけとの御上意。家光公は悠々と愛馬にまたがり、お氣にいりの旗本十六騎が、いづれも馬上に前後をかため、その後ろには、三十余名の大名小名、更にそのまた家来と、大勢のお供をしたがえまして、お成門をおでましになり、愛宕山田福寺の下へとさしかゝつて参りました。

折しも吹きおろす風は、耳もちぎれるばかりの寒風でございますが、得もいわれぬ馥郁たる梅花のかおりが、この寒風に乗ってたゞよつて参ります。思わず馬足をとめられた家光公、山上を仰ぎ見ますれば、南に面した山の中腹から頂上へかけて、源平咲きわけの梅花がみごとに咲きそろう、一入の風情でございます。しばらく見とれておられた將軍家、

家『誰ぞある、参れ』

どのお沙汰に、ハツと答えて松平紋太郎、青木清太夫、馬からヒラリくと飛びおりて御前へ伺候。

紋『何か御用にございまするか』

家『紋太郎、清太夫、あれを見よ、よい梅じゃ、一枝手折れ、城中へ土産にいたすぞ』

紋『へ、ッ、かしこまりました』

と兩人袴の股だちを取つて、バラ／＼と駈けていこうといたしますと、

家『待て／＼、紋太郎、清太夫、しばらく待て……その方どもは何で供いたした』

紋『ハッ、騎馬にてお供つかまつりました』

家『騎馬で供いたしたからには、騎馬で乗りあがれ』 紋『ハ、ッ』

といったが紋太郎、清太夫、思わず顔見合わせて、口にはいわねど、

清『オイ紋太郎』 紋『ウム』

清『どうする』

紋『大変なことになったな、武士たるべきもの、戦場へでて討ち死は覚悟だが、坂から落ち死は心細いな、どうしよう』

清『どうしようといって、命あつての物種、畑あつての芋種ということを申すが、何分に

もこれは命がけだ。一つここは胡麻化して逃げよう』

紋 『どういふ風に胡麻化す』

清 『これは病気になるより仕方がない、上さまにじき／＼に申し上げたとてお用いはなからう。年は若い、老中松平伊豆守信綱、あの男は話せるよ。どうだ、病気になるう、病気々々』

紋 『ウム、それもよからう』

目でこれだけの相談をしたのですから、昔の人はいえなかったもの、御前は体よく、かしこまりましたとお受けして、そのまゝ松平伊豆守の前へ、

紋 『ウム』 清 『ウム』

唸り声をたててやってきました。伊豆守信綱これを見て、ハ、ア病人になったなど、智恵伊豆といわれたほどの方、早くも察して、

伊 『御両所、いかゞいたした』

紋 『恐れながら御老職に願います。たゞいま上さまの御上意にて、山上の梅花を折り取れとのことにござりまするが、何分腹痛はなはだしく勤まりかねますれば、御前体よろしく……』

伊 『それは／＼御心配なこと、御病氣とあらば、是非もござらぬ。早々御帰邸の上、薬用お手当をなすつて宜しかろう、上さまにはよしなに某からおとりなしをいたす』

紋 『何分よろしくお願い申し上げます』

と兩人は、ほう／＼の体でここを立ち去りました。

將軍家は待てど暮らせど、紋太郎、清太夫の兩名が出て参りませぬから、

家『紋太郎、清太夫、支度が長いぞ、いかゞせしぞ』

この時、伊豆守信綱お側にすゝみ、

伊『恐れながら申し上げます』

家『何じや伊豆』

伊『紋太郎、清太夫兩名、急病さし起りました』

てお役勤まりかねる趣き、願いいでましたによつて、たゞいま帰邸を命じました。おゝかた今ごろは薬用手当中かと存じます』

家『オ、居らぬのか、道理で支度が長いと思つた。病氣とあらば是非がない、紋太郎、清太夫には及ばぬ、誰でもよい、乗りあがれ』

いいでしたら後へはひかぬ將軍家、いならぶ諸士は心得あると否とを問わず、もし顔を見られて、そちが乗れときた日にはたいへんですから、いずれも下うつむいております。短兵急の將軍家、いさゝか御機嫌なゝめの体にて、家『これしきの坂を乗りあがる者はないか、

徳川の武は地に落ちたるか。すぎし昔の大西大膳はいかに、明智左馬之助はおらざるか、佐々木梶原はいかに、エ、いい甲斐なき者どもかな。よいその儀ならば予が自身乗つて見せる』

というと諸角蹴こみ、馬をあおつて円福寺の門内へ乗り入れましたから、いならぶ諸士の驚きいかばかり。危ない、上さまのお身の上と声をかけますが、近づいて止めることもできず、どうしたものかといずれも手に汗をにぎつて見ているうちに、はや石段の下まで乗り進めた家光公、山上をあおぎ見た時にはさすがに驚きました。

遠くで見た時にはさほどとも思われませんでしたか、側へよつて屏風を立てたような石段を見あげて、『成る程これは厭がるのも無理ではない』と思し召したが、今さら引くに引かれず、

家『止めるなよ、止めてはならぬぞ』

と仰しやつたが、誰も止める者がありません。さすがの將軍家も心細くなつたと見えて、

家『止めるなよ、止めてはならぬぞ』

止めろといわぬばかりのお言葉。これを見て

おりました諸士が、

○『伊豆殿、上さまだいぶお困りの御様子、

お止めなされてはいかゞ』

と申しますが、伊豆守ニツコリ笑つて、

伊『捨ておけい、近ごろの上さまはちと我儘

がおすぎだ、こういう時に油をお取り申そう』

と、ひどいところで將軍家、油を取られるも

のです。モウこの辺でよかろうと機会を見て伊

豆守、バラ／＼バラツと馳せ来り、お馬の轡を

しつかとおさえ、

伊『こは上さまには何事を遊ばしまするか、

君は、源氏の長者、征夷大將軍という御大切な

る御身をもつて、かく輕々しくことを遊ばされ、

万一御身に怪我あやまちにてもござりますれば、

何と遊ばされますや。あまたの大名、馬

乗りを養いおくは、何のためでござるか、かゝ

る時のお役に立てんがために候わずや、まず、

まず／＼おとまり遊ばせ』

と、しつかと轡をおさえて止められた時に、

將軍家心のうちで、『マアよかった、この男は感

心だ、いまはじまつたことではない、いずでも

そうだ』と洒落ていらつしやる。もつとも伊豆

守のいうことは何でもお聞きになる。それはい

けませぬというどピリツときく。それがために

伊豆の山葵は利きがいい、山葵は伊豆が本場だ

とはあてにはなりません。

家『然らば他に乗る者があるか、予が乗ると

ころであつたぞ』

と仰せられたが、油汗をふきながら、伊豆守に轡を取られて、もとのところへ引きかえした。

自慢の馬術者

スッテンドウ

ソコで改めて松平伊豆守殿から、『上さまの上意、諸家において馬術の心得ある者を差しいだし、この石段を乗りあがり、山上の紅白咲きわけの梅花一枝、手折りまいれとの御事、早々自慢の馬術者にこの儀申しつけるよう』というお沙汰。

ここに当日お供の三十余頭の大小名方においては、おの／＼自慢の馬術者を選抜してそれへ

だしました。第一番に立ちいでましたのは、土手三番町にお屋敷のあつた、食禄八百石を頂戴し、荒木流の馬術を将軍家へ御指南をしております、荒木十左衛門基正という当時有名な先生、つゞいて藤堂家の家来山本右京忠重、黒田家の家来加藤勘次郎重正、水戸家の家来関口六助信連、浅野家の家来大坪備前行員、佐竹家の家来鳥居喜一郎重房などという馬術の達人といわれた面々、ズバリとそこへいならびました。

将軍家はるかにこれを御覧になり、何でもなにごと大勢いるのにでなかつたのか、予は寿命を三年ちぐめたと思ひ召されました。やがて伊豆守信綱、大勢の馬乗りの前へ進みいで、

伊『さて上さまの御上意、甚だもつて御無理のようなれども、この思し召しを貫かねば、こられた徳川家の御威信にもかゝわること、よつ

て御迷惑ながら怪我せぬよう、無事にこの坂を乗りあがり、見事、梅花を折り取って献上いたすよう、たゞし誰彼と指名するは、依怙の沙汰に相成るによつて、一二三と三本の当り籤をつくり、あたつた者が乗らるるように、サア籤をお引きなさい』

と籤をだされたが、一同顔を見合せて、あまりこういふ籤にはあたりたくない。そのうちでも、拙者は籤よわい、がこういふ籤は得てあたりたがるものでござると、口のなかで法華經を誦するもあり、南無阿弥陀仏を唱えるもあり、天照皇大神宮と念ずるもあり、いずれも籤を引いて見ると、第一番に藤堂家の家臣山本右京忠重、第二番が佐竹家の家臣鳥居喜一郎重房、第三番が水戸家の家臣関口六助信連ときまりました。

ここで山本右京忠重、さつそく身支度をいたし、三春じたての愛馬、八寸にあまれる逸物に、貝摺の鞍おいて、紺縮緬の手綱をかいぐり、七五三藤縮の鞭を持つと、パツ／＼パツ／＼パツと乗りだしました。家光公はるかに御覧ぜられて、

家『オ、立派なる振舞、何者の家来なるぞ』

○『藤堂の家来、山本右京忠重と申する者にございます』

家『ウム、とう／＼のところ御苦労じゃな』

將軍家なか／＼しゃれ者です。上さまのお声がかりをいたゞいたのは、陪臣としてこの上もない名譽、たとえ死するも惜しからじと……まことに勿体ない話でございますが、これが今日とちがつて封建時代の氣質でございます。

右『ハイッ、ハイッ、ハイッ』

パツ、パツ、パツ、パツ、パツ、パツ、パツと
輪乗りをかける。春駒とて馬は勇みたつ『ヒー
ン……』馬のいなゝくことを、武家では決して
啼くとは申しませぬ、駒が勇むと申します。い
なゝく馬を一足乗りさげ、山上を見あげました
る山本右京忠重、諸角を蹴こんで、一鞭。

右
『ハイヨーツ』

パツ、パツ、パツ、と乗りあがります。

一同は手をうちたゞき、

○『ソレ乗つたるぞ、えらいぞー、えらいぞ
えらいぞ』

と拍手喝采——馬は勇みに勇んで乗りあがり
ましたが、坂の七合目まで参りますと、ピタ
リととまりました。下で見ている連中、

△『アレ馬がとまったぞ』

と瞳を定めて見ております。右京忠重、

右
『ドーツ、ドーツ』

といいながら馬の様子を見ると、口から綿の
ような泡を吹き、腹はまるで波を打っておりま
すのは、心臓の鼓動が烈しいため……、よほど
苦しいと見えて、フーツ、フーツと太い息をは
いております。

右
『ハイ、ドーツ、ハイツ……』

いろ／＼に見たが、動こうともいたしま
せぬ。右京はどの辺まで乗りあがったかと、坂
の下を見おろすと断崖絶壁、さしもの右京も眼
がグラ／＼とくらみ、やりそこなつては大変だ
という気がでると、カッと逆上いたしました。
情けないものでございます、鞭を打つべきとこ
ろでないのに、焦つたものか『ハイツ』と一つ
蹴こんでおいで鞭を入れましたから、馬は一声
いなゝくとともに棹だち。下で見ていた連中、